

子女
法文本日代現

編所輯編館成開京東

版藏館成開京東

教
42
200

42215

教科書文庫

4
815
42-1925
20000 73168

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

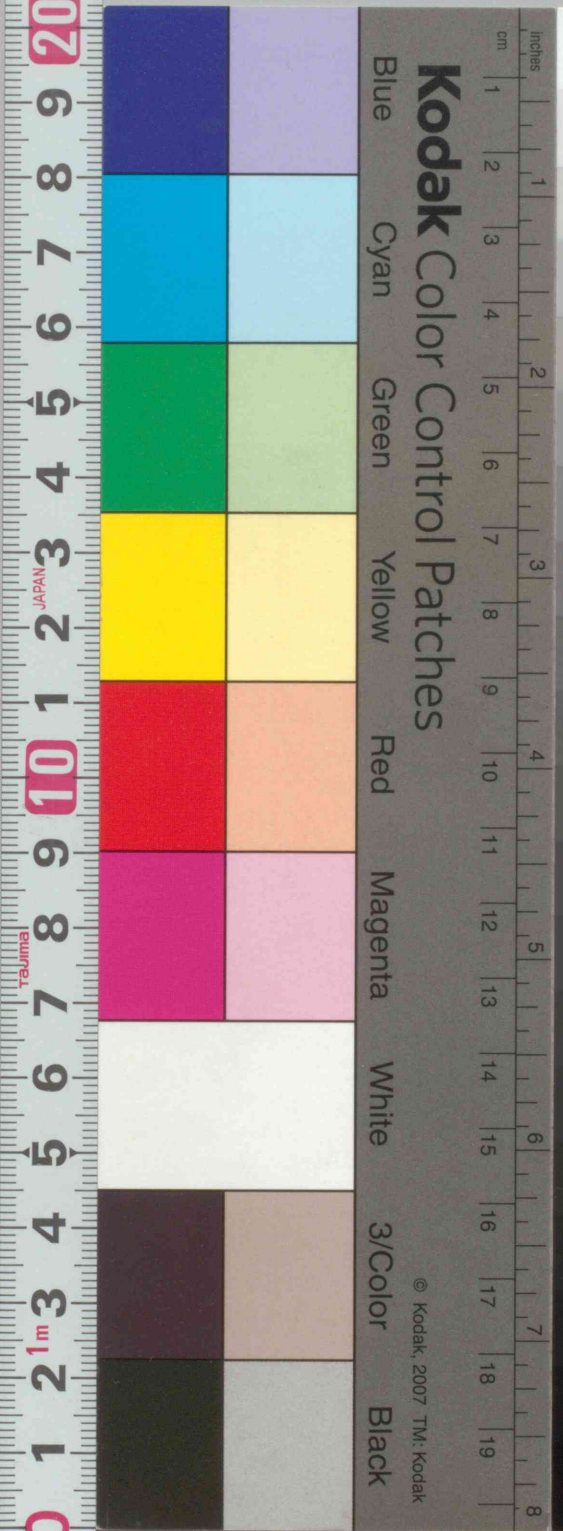


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫

4

815

42-1925

2000073168

濟定檢省部文

用科語國校學範師・校學女等高 日四十月一年四十五大

子女 法文本日代現



編所輯編館成開京東



版藏館成開京東

広島大学図書

2000073168



4b
815
大14

女子現代日本文法

目次

第一編	品詞 (その一)	
第一章	總說	一
第二章	名詞	二
第三章	代名詞	六
第四章	動詞	九
第五章	形容詞	二
第六章	副詞	三
第七章	接續詞	六

第八章 感動詞……………

一八

第九章 助動詞……………

一九

第十章 助詞……………

二三

第二編 品詞 (その二)

第一章 文語動詞の活用……………

二六

第二章 口語動詞の活用……………

四〇

第三章 動詞の活用の見分け方……………

四六

第四章 動詞の自他……………

四九

第五章 語尾の紛れ易い動詞……………

五三

第六章 形容詞の活用 附 形容動詞……………

五七

第七章 用言の音便……………

六四

第三編 品詞 (その三)

第一章 助動詞の種類……………

六六

第二章 文語助動詞の用法……………

八三

第三章 口語助動詞の用法……………

九三

第四章 助詞の用法……………

九五

第五章 紛れ易い品詞……………

一〇〇

第四編 文章

第一章 文及び文の成分……………

一一六

第二章 節……………

一二六

第三章 文の成分の倒置及び省略……………

一二九

第四章 文の組織上の種類……………

一三六

第五章 文の性質上の種類……………一元

附録 文法上許容スベキ事項

附表 動詞活用表

文語助動詞活用表

口語助動詞活用表

文語助動詞と用言との連続表

口語助動詞と用言との連続表

女子現代日本文法

第一編 品詞(その二)

第一章 總説

文語

口語

習慣は第二の天性なり。

藝は身を助ける。

希望は人生の光明なり。

出る釘は打たれる。

我が國の言葉には、右の上段のやうに、文章にだけ用ひるものと、下段のやうに、日常の談話に用ひるものとの二種がある。この中、文章用の言葉を文語といひ、談話用の言

文語

口語

葉を口語といふ。

文法

文語にも口語にも、それ〴〵一定の法則がある。この法則を文法といふ。

文語

家庭は國家の礎なり。

口語

猿も木から落ちる。

玉磨かざれば光なし。

流れる水は腐らない。

單語

右の上段の文は六つの語に分れ、下段の文は五つの語に分れる。この分れた一つ〴〵の語は、言葉の最小單位である。言葉の最小單位を單語といふ。

第二章 名詞

文語

紫式部は才女なり。

口語

重盛は忠臣である。

山の上にも櫻あり。

飛行機は空を支配する。

去るものは追はず。

破産は臺所の隅から起る。

勤勉は幸福の母なり。

平和の鐘が響きました。

名詞

右の傍線を施したものは、いづれも物事の名として用ひる單語である。かやうに、物事の名として用ひる單語を名詞といふ。

注意

一、お琴・み心・ご機嫌・姉君・叔父・上林先生などは、物事を丁寧にいふ場合に用ひる名詞である。

二、山々・國々・歌など、娘ども・親たちなどは、物事が多數であることを表す名詞である。

名詞の中には、物事の數量や順序を表すものがある。

一	一本	二冊	人五人	家十軒	金百圓
二	下駄三足	洋服四着	鉛筆五ダース	いくつ	
三	一つめ	二つめ	三等	四級	
四	五軒目	六號	第七回	第八番	
五	二の鳥居	三の卷	大正十四年	いくつめ	

右の傍線を施したものの中、一は「いくつ」と數を數へるもの、二は「いくつめ」と順序を數へるものである。これらも廣い意味では物の名であるから名詞である。

注意

右のやうな名詞を特に數詞といふこともある。

名詞は文語も口語も變らない。

練習

次の文から名詞を抜き出せ。

- 一、春は來りぬ、春は來ぬ。霞よ雲よゆるぎいで、氷れる空をあたくめよ。花の香送る春風よ、眠れる山を吹きませ。
- 二、我が國の國旗を見よ。紅のくれなゐ一色にて白地に日輪を描き出せるは、自ら天壤とともに無窮なる神勅を現したるものにて、その色彩の單純なるは、善く我が國民の性情を示せるものといふべし。
- 三、震災があつてからまだ二箇月に満たない間に、灰燼の東京がこれだけのバラック街に復活の色を見せたといふことは、人間の生きようとする強い意志の表現に相違ない。

第三章 代名詞

文語

われはかれを呼べり。

これとそれとを買はん。

こゝかしこを散歩せり。

あちこちと奔走す。

口語

あなたと遊びませう。

あれにいたします。

そこに鳩が居る。

そちらへいかう。

代名詞

右のわれ・かれ・あなたは人の名の代りに、これ・それ・あれは物の名の代りに、こゝ・かしこ・そこは場所の名の代りに、あち・こち・そちらは方角の名の代りに用ひる單語である。かやうに、物事の名の代りに用ひる單語を代名詞といふ。

注意

一、代名詞の中には、たれ・なにどことちらなどのやうに、指すとこの不定なものもある。

二、わたくしども・あなたがた・汝ら・おまへたちなどは、物事が多數であることを表す代名詞である。

代名詞には、文語と口語とで形の異なるものがある。

代名詞一覽表

人代名詞		自稱	對稱	他稱	不定稱
わ・われ(文)	わらは(文)	あなた(口)	あの(お)かた(口)	た・たれ(文)	だれ(口)
わたくし(口)	あなた(口)	あ	れ(口)	た	れ(口)
じぶん(口)	おまへ(口)	あ	れ(口)	だ	れ(口)

指示代名詞

事物に	場所に	方角に	
近 稱	こ こ こ れ (口文)	こ こ ち ち (文)	こ こ な た (文)
中 稱	そ そ そ れ (口文)	そ そ ち ち (文)	そ そ な た (文)
遠 稱	あ あ あ れ (口文)	あ あ ち ち (文)	あ あ な た (文)
不 定 稱	ど ど ど れ (口文)	ど ど ち ち (口文)	ど ど ち ち (口文)

練習

次の文から名詞・代名詞を抜き出せ。

- 一、かれの名譽はわが校並にわれら一同の名譽なり。
- 二、どれもこれも良い品ばかりで、私は選擇に困りました。
- 三、机の上に蜜柑箱、
 - それでも届かぬ棚の上、
 - またその上に玩具箱、
 - なにかありさうな棚の上、
 - 兄さまのやうになりたいな。

第四章 動詞

文語

蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。
 賤が伏屋に月もさす。
 能ある鷹は爪を隠す。

口語

堅い木は折れる。
 朝は五時に起きる。
 母の病気で心配する。

動詞

右の傍線を施したものの中、舞ひ、歌ふ、さす、隠す、折れるは自然物の動作、起きるは人の動作、心配するは心の動作を表す詞である。また、あるは物事の存在することを表す詞である。かやうに、物事の動作や存在を表す單語を動詞といふ。

注意

文語の動詞と口語の動詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から動詞を抜き出せ。

- 一、病は口より入り、禍は口より出づ。
- 二、春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。
- 三、人の是非を見ることは易く、己の長短を知るとは難し。

形容詞

第五章 形容詞

文語

山高く、水清し。

良薬は口に苦し。

梅檀は二葉より芳し。

右の傍線を施したものは、いづれも物事の有様を表す單語である。かやうに、物事の有様を表す單語を形容詞といふ。

口語

夏は暑く、冬は寒い。

噂は風より早い。

火を吹く力も無い。

注意

文語の形容詞と口語の形容詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から形容詞を抜き出せ。

- 一、義は泰山よりも重く、命は鴻毛よりも軽し。
- 二、先生は學博く、徳高し。
- 三、世間は年中忙しく騒がしい。
- 四、兎は前足が短くて、後足が長い。
- 五、この品物は價が安くて、質がよい。

体 名詞
 言 代名詞
 用 動詞
 形 形容詞

體言
用言

以上説明したものの中、名詞と代名詞とは物事の本體を表す言葉であるから、これを總稱して體言といふ。また、動詞と形容詞とは體言の作用を表す言葉であるから、これを總稱して用言といふ。

第六章 副詞

文 語

風かぜますますすくく烈れつしし。

全軍ぜんぐん殆たいどど亂らんるる。

病びやう頗ひんるる篤とくしし。

腕うで力ちから殊ことにに強ちやうしし。

口 語

仕事しごとががななかかくく苦くししいい。

林檎りんごはは實じつににううままいい。

形かたちががずずつつとと大おほききいい。

お前おまえははししつつかかりりややれれ。

右の傍線を施したものは、いづれも下の圈點を施した用言を修飾するものである。かやうに、用言を修飾する單語を副詞といふ。

副詞には、この外に、他の副詞を修飾し、または體言語句文

を修飾するものがある。

文語

- 一、いと静かに歩む。
- 二、僅に五里の道なり。
- 三、容貌恰も猿の如し。
- 四、げに都會は便利なり。

口語

- 一、極ゆつくりやれ。
- 二、たつた一秒の差だ。
- 三、私はきつと負けない。
- 四、畢竟あなたが悪い。

右の一のいと極は、それ〴〵副詞の静かにゆつくりを修飾し、二の僅に、たつたは、それ〴〵下の圈點を施した體言を修飾し、三の恰も、きつとは、それ〴〵下の圈點を施した語句を修飾し、四のげに、畢竟は、それ〴〵下の圈點を施した文を修飾するもので、いづれも副詞である。

副詞

主に用言を修飾し、時には他の副詞體言語句文を修飾する單語を副詞といふ。

副詞の用法は文語も口語も變らない。

練習

次の文から副詞を抜き出せ。

- 一、病人は、なるべく親切に、丁寧な、また静かにこれを介抱すべし。
- 二、いよ〴〵降りしきる雨に、水はますます〴〵増加せり。
- 三、春暖漸く催して、鳥の聲いと長閑かに聞ゆ。
- 四、午砲がドンと鳴ると、お腹が急にすくやうに感じます。
- 五、僅か三點の差で敗けたのは、實に残念でございました。
- 六、本當に力のある文章を作らせるには、自分の考を自分の言葉で自分の思ふやうに書けといふのが最も當つてゐる。

第七章 接續詞

文語

花及び月を眺む。

地理或は歴史を讀む。

勤めよ。然らば安全な

るべし。

彼は華族なり、されど行

動は平民的なり。

口語

風が吹く、それに雨も降る。

行くか、それとも歸るか。

可なり勉強した。だから

入學試験にも合格した。

あれは病氣だ。でも學校

には出席する。

接續詞

右の傍線を施したもののやうに、上・下・の・語・句・や・文・を・結・び・つ・け・る・單・語・を・接・續・詞・と・い・ふ・。

接續詞の用法は文語も口語も變らない。

練習

次の文から接續詞を抜き出せ。

- 一、茶並に生絲は我が國の二大輸出品なり。
- 二、夜食を節せよ。然らざれば健康に害あり。
- 三、彼は琴、オルガン及びヴィオリンを學べり。
- 四、汝は地理若しくは歴史を復習すべし。
- 五、今日は雨が降つた。だから音楽會には人が少かつた。
- 六、私は年末年始または中元などの贈答は止めたがよいと思ひます。
- 七、作文は書きました。けれども先生にはまだ出しません。
- 八、私は走ることは早い。でも、あなたにはかなひません。
- 九、彼は身分は卑しい。しかし徳は高い。
- 一〇、自由か、それとも死か、どれか一つを選べ。

第八章 感動詞

文語

あゝ、かなしいかな。

あな、うらやまし。

あはれ、めでたき月かな。

いざ、行かん。

いざや、歌はん、諸共に。

口語

あ、いた(痛)。

あら、お珍しい。

さあ、参りませう。

おつと、あぶない。

はい、承知しました。

感動詞

右の傍線を施したもののやうに、主に感情の動く時に發する單語を感動詞といふ。感動詞の用法は文語も口語も變らない。

練習

次の文から副詞・接續詞・感動詞を抜き出せ。

一、あはれ、めでたき今日の日や。 あはれ、楽しき今日の日や。

いざ、もろともうちつどひ、 君が八千代を歌はなん。

二、やよ、汝、思うてもみよ。 齡既に十五歳に達せしものにして、未だか

かることを知らざるものいづこにかある。

三、ねえ、あなたがそのおつもりなら、願つてもない幸ひです。 きつと

それを實行しませう。 しかし、いざ實行するといふまでは、誰にも

洩さないやうにませう。

四、あゝ、危い。 そら、そら、子供が煮湯へ這入る。 危い。 そら、

そら。

第九章 助動詞

文語

字を書か

妹を呼ば

人を誘は

舟を漕が

遅刻し

門を閉ち

塵を捨て

試合を見

ず。

ん。

しむ。

たり。

けり。

ぬ。

口語

字を書か

妹を呼ば

人を誘は

舟を漕が

遅刻し

門を閉ち

塵を捨て

試合を見

ない。

う。

せる。

た。

助動詞

右の傍線を施したもののやうに、常に動詞に附屬して、動詞の意味を補助する單語を助動詞といふ。

助動詞は更に他の助動詞に結びつくことがあり、また、稀には體言に結びつくこともある。次の例を見よ。

文語

雨は降らざるべし。

今年は豊年なり。

口語

父は歸りますまい。

これが私の家

だ。です。

注意

文語の助動詞と口語の助動詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から助動詞を抜き出せ。

一、驕るものは久しからず。

- 二、習慣は第二の天性なり。
- 三、先生、生徒に運動せしむ。
- 四、本校は昨日運動會を舉行せり。
- 五、やがて藤の花も咲かん。
- 六、それぐらゐの本は私にも讀まれる。
- 七、早く歸つて兩親の顔が見たい。
- 八、大聲で呼んでも返事もしない。
- 九、姉が妹に着物を洗はせる。
- 一〇、午後三時までにはきつと參ります。

第十章 助詞

文語

櫻の花。
月と花と雪。

口語

二階から落ちる。
鋏で切る。

右のの_二と_一から_三では、いづれも體言に添はつて、他の單語との關係を示すものである。

文語

風烈しくとも、行かん。
見物せずして歸る。

口語

風が烈しくても、行かう。
差支があるから、缺席する。

右のとも_二して_一ても_三からは、用言や助動詞に添はつて、他の單語との關係を示すものである。

文語

こゝよりぞ見ん。
悪事をすな。
面白き景色かな。

口語

今度こそうまくやらう。
誰も居らぬか。
よいお天氣ですね。

助詞

助詞には、右の傍線を施したもののやうに、種々の語に添はつて、意味を強め、または禁止・疑問・感歎などの意を表すものがある。
單語に添はつて他の單語との關係を表し、またはその働を助ける單語を助詞といふ。

注意 文語の助詞と口語の助詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から助詞を抜き出せ。

- 一、品性は人の鏡なり。
- 二、我こそは天下第一の名僧よ。
- 三、期限は今日に迫れども、準備は未だ成らず。
- 四、地球は太陽の周圍を廻轉す。

品詞

これまで述べて来た名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞・助詞の九つを、それ／＼品詞といふ。

練習

次の文を品詞に分けよ。

- 一、租税は期日までに必ず役所に納むべし。
- 二、今年の暑氣は昨年よりも烈し。
- 三、予は奈良に遊び、次いで吉野に廻る豫定なり。
- 四、すはといへば、すぐに出發する用意が出来た。
- 五、日本は面積は狭いが、人口はなかく多い。

第二編 品詞 (その二)

第一章 文語動詞の活用

活用

- 一、もろともに死なん。
- 二、悉く死に絶えたり。
- 三、毒を飲めば死ぬ。
- 四、死ぬる覺悟にて出征す。
- 五、父死ぬれば、子相續す。
- 六、いさぎよく死ぬ。

右の例のやうに、死ぬといふ動詞は、その語形が種々に變化する。かやうに、語形の變化することを活用といひ、活

活用形

用のおのくの形の活用形といふ。

活用形の名稱

右に挙げた六つの活用形には、それ／＼特別の名稱がある。

第一活用形は、死なんのやうに、未然の意味を表す形であるから、これを未然形といふ。

第二活用形は、死に絶えのやうに、用言に連ねる形であるから、これを連用形といふ。

第三活用形は、文章が終止する場合に用ひる形であるから、これを終止形といふ。

第四活用形は、死ぬる覺悟のやうに、體言に連ねる形であ

終止形

連用形

未然形

連體形

るから、これを連體形といふ。

已然形

已に定まつてゐる場合に用ひる形であるから、これを已然形といふ。

命令形

第六活用形は、命令の意味を表す形であるから、これを命令形といふ。

四段活用

	讀	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア	ま						
イ	み						
ウ	む						
エ	め						
段	め						

未然形

書を讀まん。

連用形

書を讀み果てたり。

終止形

書を讀む。

連體形

書を讀む暇なし。

已然形

書を讀めば、知識を増す。

命令形

書を讀め。

四段活用

右のやうに、讀むといふ動詞は五十音圖のアイウエの四段に活用するから、これを四段活用といふ。

注意 四段活用は終止形と連體形と、また已然形と命令形とは、いづれも同形である。

勝つ・走る・飛ぶ・書くの活用を檢せよ。

ラ行變格活用

	有	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア段	ら						
イ段	り						
ウ段	る						
エ段	れ						
段	れ						

未然形 面白きこともあらん。

連用形 悲しき折もありき。

終止形 樂しきことあり。

連體形 思慮ある人は少し。

已然形 差支あれば、行かず。

命令形 長^{なが}へに幸あれ。

注意 きに續くものは連用形である。

右のありはア・イ・ウ・エの四段に活用するが、その終止形が

ラ行變格活用

四段活用と異なるから、これをラ行變格活用といふ。

注意 居^ゐりは四段に活用させてもよい。(許容事項第一参照)

ナ行變格活用

死ぬといふ動詞は、前に述べた用例で見るやうに、ア・イ・ウ・エの四段に活用するが、その連體形と已然形とが四段活用と異なるから、これをナ行變格活用といふ。

注意 死ぬは四段に活用させてもよい。(許容事項第一参照)

上一段活用

	(見)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
イ	み						
	み						
	みる						
	みる						
	みれ						
段	みよ						

未然形 試合を見ん。
 連用形 試合を見たり。
 終止形 月を見る。
 連體形 見る人少し。
 已然形 親の笑顔を見れば、いと嬉し。
 命令形 心して見よ。

注意 たりに續くものは連用形である。

右のやうに、見るといふ動詞はイ段ばかりに活用するか
 ら、これを上一段活用といふ。
 着る・似る・煮る・射るの活用を檢せよ。

上一段活用

上二段活用

	起				
イ	き	未然形	き	連用形	き
	く	終止形	くる	連體形	くれ
ウ	き	連用形	きよ	命令形	
	く	終止形			

未然形 直ちに起きん。
 連用形 起き終りぬ。
 終止形 早く起る。
 連體形 早く起くる人は稀なり。
 已然形 早く起くれば、心地よし。
 命令形 速に起きよ。

右のやうに、起くといふ動詞はイウの二段に活用するか

上二段活用

ら、これを上二段活用といふ。

【注意】恨むは四段に活用させてもよい。(許容事項第一参照)

落つ・閉づ・強ふ・懲るの活用を検せよ。

下一段活用

		(蹴)	
エ	未然形	け	未然形
	連用形	け	連用形
	終止形	ける	終止形
	連體形	ける	連體形
	已然形	けれ	已然形
	命令形	けよ	命令形
段			

未然形 鞠を蹴ん。

連用形 鞠を蹴たり。

終止形 鞠を蹴る。

連體形 鞠を蹴る人は誰ぞ。

下一段活用

下二段活用

已然形

強く蹴れば、高く飛ぶ。

命令形

鞠を蹴よ。

【注意】未然形の蹴んは現代文では殆ど用ひない。

右のやうに、蹴るといふ動詞はエ段だけに活用するから、これを下一段活用といふ。

		忘	
エ	未然形	れ	未然形
	連用形	れ	連用形
	終止形	る	終止形
	連體形	る	連體形
	已然形	るれ	已然形
	命令形	れよ	命令形
段			
エ			
段			

未然形

悲しさを忘れん。

下二段活用

連用形 恩を忘れ果てたり。

終止形 恩を忘る。

連體形 恩を忘るゝ人多し。

已然形 恩を忘るれば、禽獸に同じ。

命令形 悲みを忘れよ。

右のやうに、忘るといふ動詞はウ・エの二段に活用するから、これを下二段活用といふ。

捨つ・受く・兼ね・譽むの活用を檢せよ。

力行變格活用

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形

	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
オ段							
イ段							
ウ							
段							
オ段							

未然形 姉もこん。

連用形 弟もきたり。

終止形 妹もく。

連體形 くる人もなし。

已然形 夏くれば、暑し。

命令形 早くこよ。

注意 終止形はくと言ひきることは少い。

カ行變格活用

右の來といふ動詞のやうに、イ・ウ・オの三段に活用するものをカ行變格活用といふ。

注意 カ行變格活用はまたカ行三段活用ともいふ。

サ行變格活用

	(爲)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
エ段	せ						
イ段	し						
ウ	す						
		する					
段		すれ					
エ段		せよ					

未然形 運動をせん。

連用形 運動をしたり。

終止形 運動をす。

サ行變格活用

右の爲といふ動詞のやうに、イ・ウ・エの三段に活用するものをサ行變格活用といふ。

注意 サ行變格活用はまたサ行三段活用ともいふ。

サ行變格活用の爲は、他の詞と結びつくことが多い。

出發す。 勉強す。 練習す。

正しうす。 全うす。 罪す。

此等はいづれも爲が他の詞と結びついて、サ行變格活用となつたものである。

注意 一、運動すは一つの動詞である。
 二、運動をすは、助詞が中間にあるから三つの單語である。
 議論す^{かたじけな}辱うす讀書す賞す、の活用を檢せよ。

第二章 口語動詞の活用

口語四段活用

	(文語四段)	(文語ラ變)	(文語ナ變)
未然形	咲かう。	有らう。	死なう。
連用形	咲きます。	有ります。	死にます。
終止形	咲く。	有る。	死ぬ。
連體形	咲く時。	有る處。	死ぬ人。

右のやうに、文語の四段活用ラ行變格活用ナ行變格活用は、口語ではいづれも四段活用となる。

口語上一段活用

	(文語上一段)	(文語上二段)
未然形	見よう。	起きよう。
連用形	見ます。	起きます。
終止形	見る。	起きる。
連體形	見る人。	起きる時。

注意 ますに接するものは連用形である。
 已然形 咲けば。 有れば。 死ぬば。
 命令形 咲け。 有れ。 死ぬ。

口語上一段活用

口語下一段活用

已然形 見れば。 起きれば。

命令形 見よ。 起きよ。

右のやうに、文語の上一段活用・上二段活用は、口語では上一段活用となる。

口語下一段活用

(文語下一段)

(文語下二段)

未然形 蹴よう。 忘れよう。

連用形 蹴ます。 忘れます。

終止形 蹴る。 忘れる。

連體形 蹴る時。 忘れる人。

已然形 蹴れば。 忘れれば。

口語カ行變格活用

命令形 蹴よ。 忘れよ。

右のやうに、文語の下一段活用・下二段活用は、口語では下一段活用となる。

口語カ行變格活用

未然形 誰かこよう。

連用形 誰かきます。

終止形 誰かくる。

連體形 くる人がない。

已然形 くればよい。

命令形 早くこい。

右のやうに、文語のカ行變格活用は口語でもカ行變格活

口語サ行變格活用

用であるが、終止形と命令形とは文語のと異なる。

口語サ行變格活用

未然形

勉強をせぬしよう。

連用形

勉強をします。

終止形

勉強をする。

連體形

勉強をする人。

已然形

勉強をすればよい。

命令形

勉強をせよ。

右のやうに、文語のサ行變格活用は口語でもサ行變格活用であるが、未然形と終止形とは文語のと異なる。

以上説明した文語動詞の活用と口語動詞の活用とを比較すると、次のやうになる。

文語 (九種)	口語 (五種)
四段活用 ラ行變格活用 ナ行變格活用	四段活用
上一段活用 上二段活用	上一段活用
下一段活用 下二段活用	下一段活用
カ行變格活用	カ行變格活用
サ行變格活用	サ行變格活用

第三章 動詞の活用の見分け方

文語動詞の
活用の見分
け方

文語動詞の活用の見分け方

- 一、四段活用 咲か(ア)―ず。 讀ま(ア)―ず。
- 二、上二段活用 起き(イ)―ず。 落ち(イ)―ず。
- 三、下二段活用 捨て(エ)―ず。 枯れ(エ)―ず。

右のやうに、動詞をず_レに連ねる場合に、一のやうにア段から續くものは四段活用、二のやうにイ段から續くものは上二段活用、三のやうにエ段から續くものは下二段活用である。たゞし、次の語はすべて記憶せよ。

ラ行變格活用 有り 居り(侍りは現代文では用ひない。)

口語動詞の
活用の見分
け方

口語動詞の活用の見分け方

- 一、四段活用 咲か(ア)―ない。 讀ま(ア)―ない。
- 二、上二段活用 起き(イ)―ない。 落ち(イ)―ない。
- 三、下二段活用 捨て(エ)―ない。 枯れ(エ)―ない。

右のやうに、動詞をないに連ねる場合に、一のやうにア段

ナ行變格活用

死ぬ 往ぬ

上一段活用

着る 似る 煮る 乾る 射る

鑄る 居る 見る 率ひきある

下一段活用

蹴る

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

から續くものは四段活用、二のやうにイ段から續くものは上一段活用、三のやうにエ段から續くものは下一段活用である。たゞし、次の二語は記憶せよ。

カ行變格活用

來 爲

サ行變格活用

練習

一、次の文語動詞の活用名を示せ。

遊ぶ。達す。怖づ。過ぐ。治む。信ず。射る。留む。死ぬ。
蹴る。埋む。出發す。

二、次の口語動詞の活用名を示せ。

交る。來る。來る。爲る。爲す。居る。居る。漕ぐ。眺める。

三、次の文から動詞を抜き出して、その何活用に屬するかを説明せよ。

夕の空を眺むれば、浮きて漂ふ叢雲を、峰の嵐に拂はせて、輝き出づる望の月。心の儘になるならば、取りて飾りてわが母の朝の鏡にまゐらせん。

四、次の文の傍線を施した動詞の活用形は何か。

最大限に活動するには、人はまづ己が全力を竭すことを要する。しかし、人壽には限がある。限ある年月を以て限なき事業に對して活動しようとするには、力量の全體を傾け盡してもまだ足らないだらう。それゆゑ、汝の最善を盡せばよいのである。

第四章 動詞の自他

他動詞

文語

姉は琴を弾ず。

口語

猫が鼠を捕る。

妹は本を讀む。

下女が門を開ける。

右の例の彈ず讀む捕る開けるといふ動詞は、その動作の働を受ける琴本鼠門などの詞を必要とする。即ち此等の動詞は他に働を及ぼすものである。他に働を及ぼす動詞を他動詞といふ。

他動詞

自動詞

文語

口語

花咲く。

夜が明ける。

雨降る。

日が暮れる。

右の例の咲く降る明ける暮れるといふ動詞は、自己だけで花雨夜日の働を務めて、他に働を及ぼさないものである。

自動詞

他に働を及ぼさない動詞を自動詞といふ。

動詞の中には、自動詞と他動詞とその形が全く同じいものもあり、また二つの形がよく似たものもある。

文語

口語

花開く。(四段)……自動詞

風が吹く。(四段)……自動詞

門を開く。(四段)……他動詞

笛を吹く。(四段)……他動詞

右は自動詞と他動詞とが全く同形のものである。

文語

口語

水流る。(下二段)……自動詞

舟が沈む。(四段)……自動詞

水を流す。(四段)……他動詞

舟を沈める。(下二段)……他動詞

右は自動詞と他動詞との形がよく似たものである。

練習

一、次の文語動詞を自動詞と他動詞とに分け、その何活用であるかを述べよ。

イ 月見ゆ。
月を見る。

ロ 葉落つ。
葉を落す。

ハ 水冷ゆ。
頭を冷す。

二、次の口語動詞を他動詞と自動詞とに分け、その何活用であるかを述べよ。

イ 足が進む。
足を進める。

ロ 人が笑ふ。
人を笑ふ。

ハ 帯が解ける。
帯を解く。

三、次の文から動詞を抜き出し、その自他を區別せよ。

イ、身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐることは難し。

ロ、試験が終りましたら、その日に郷里へ歸ります。

語尾の紛れ易い動詞

第五章 語尾の紛れ易い動詞

動詞はすべて五十音圖の或一行だけに活用するものであるから、その何行に活用するかを知らば、動詞の假名遣を誤ることはない。

ア行	あ	い	う	え	お
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を

紛れ易い動詞は、右に示したやうに、ア行・ハ行・ヤ行・ワ行に活用するものである。

ア行の動詞

得う

(下二段活用)

射う

鑄う

(上一段活用)

ヤ行の動詞

老や

悔や

報や

(上二段活用)

甘や

癒や

覺や

聞や

消や

越や

肥や

凍や

榮や

牙や

聳や

絶や

費や

煮や

映や

(下二段活用)

生や

冷や

殖や

吠や

見や

燃や

萌や

悶や

ワ行の動詞

居わ

率わ

(上一段活用)

植わ

飢わ

据わ

(下二段活用)

ハ行の動詞

右に挙げたものの外は、大抵ハ行の動詞と心得よ。

次に紛れ易い動詞は、ザ行とダ行とに活用するものである。

ザ行

ざ

じ

ず

ぜ

ぞ

ダ行

だ

ぢ

づ

で

ど

ザ行の動詞

混ま

混ま

(下二段活用)

論ま

混ま

信ま

……など

(ザ行變格活用)

ダ行の動詞

右に挙げたものの外は、ダ行の動詞と心得よ。

以上説明したものは、すべて文語の動詞だけであるが、口語の場合には、これによつて直ちに推測することが出来る。例へば、犬吠ゆの場合に、吠ゆがヤ行下二段活用であることを知ると、口語は下二段活用であるから、犬が吠えるとなり、木を植うの場合に、植うがワ行下二段活用であることを知ると、口語は下二段活用であるから、木を植ゑるとなることがわかる。

練習

一、次の空位に適當な文字を入れよ。

イ、鐘の音冴□て聞□たり。

ロ、飢□且凍□たるものは、衣食を選ぶに暇なし。

ハ、耻□てよく改め、覺□て永く忘れず。

ニ、堪□忍ぶことが必要だと思□ます。

ホ、物質と精神との両面を備□なければ、完全な生活とはい□ません。

二、左の語の文語の活用を問ふ。

論ず。諷す。費ゆ。消ゆ。植う。据う。

三、左の語の口語の活用を問ふ。

吠える。鑄る。射る。堪へる。

第六章 形容詞の活用 附 形容動詞

形容詞も動詞と同じく活用する品詞であるが、その種類はく活用としく活用との二つだけである。

文語形容詞の活用

文語形容詞の活用

く活用	高	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
活しく用く	美	しく	しく	し〇	しき	しけれ

未然形

山高くば、登らじ。

花美しくば、見ん。

連用形

山高く聳ゆ。

花美しく咲く。

終止形

山高し。

花美し。

連體形

高き山あり。

美しき花なり。

已然形

山高ければ、登らず。

花美しければ、愛でらる。

注意

一、未然形もばに結びつく。

口語形容詞の活用

口語形容詞の活用

無し・面白し・悲し・苦し、を活用させよ。

ニ、しく活用の終止形は美ししとはいはない。たゞし悪しし・勇まししなどのやうに用ひる習慣のあるものは使用してもよい。(許容事項第二参照)

く活用	高	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
活しく用く	美	しく	しく	しい	しい	しけれ

未然形

高くはない。

美しくはない。

連用形

高く聳える。

美しく咲く。

終止形

山が高い。

花が美しい。

連體形

高い山がある。

美しい花だ。

文語形容動詞

已然形 高ければ、登らう。美しければ、愛でられる。
注意 ないに接するものは未然形である。
無い、面白い、悲しい、苦しい、を活用させよ。

文語形容動詞

形容詞の連用形が動詞のありに結びついて、ラ行變格活用となることがある。

高くありー高かり。

美しくありー美しかり。

副詞の穩かに堂々となどが動詞のありに結びついて、ラ行變格活用となることもある。

穩かにありー穩かなり。

口語形容動詞

堂々とありー堂々たり。

右の例の高かり、美しかり、穩かなり、堂々たりなどのやうに、意味は形容詞のやうで、活用の形式は動詞と同じのもの。を形容動詞といふ。

靜かなり、嬉しかり、爛漫たり、を活用させよ。

口語形容動詞

今日は實に穩かな日です。

明日は今日よりは涼しからうと思ひます。

口語形容動詞は、右の傍線を施したもののやうに用ひられるが、完全な活用形はない。

表用活詞容形

用活くし		用活く		名用活
口語	文語	口語	文語	
美		高		文體
美		高		活用形
しく	しく	く	く	未然形
しく	しく	く	く	連用形
しい	し〇	い	し	終止形
しい	しき	い	き	連體形
しけれ	しけれ	けれ	けれ	已然形

表用活詞動容形

語	活用形
連用形	
終止形	
連體形	
已然形	
命令形	

練習

次の文から形容詞と形容動詞とを抜き出せ。

- 一、人の苦を見て嬉しく思ふ人の心はあさまし。
- 二、川端を渡る涼しき風は己が面を拂ひ、漫々たる水の上には銀波走る。
- 三、憂しとも思ひ、つらしとも思ひながら、そのこと爲し果てたる後湯あみしたる時の心地はいとすがくし。
- 四、この美しい海の色は、どこの綺麗な絹物店でも見出すことは出来ずまい。
- 五、細い、太い、短い、長い、無数の氷柱が枝から垂れた状は、實にみごたなものです。
- 六、右と左の眺望を低い岬で限られた小さい入江は、池か湖かのやうに見える。

第七章 用言の音便

音便

言語は發音の便宜上、もとの音が變つて他の音となるこ
とがある。これを音便おんべんといふ。

音便にはい音便・う音便・撥音便・促音便の四種ある。

い音便

仰あやぎて

天を仰いで泣く。

悲あはしき

あゝ、悲しいかな。

聞ききて

それは聞いて知つてゐる。(口)

咲さき(たり)

花が咲いた。(口)

ござごります

さやうでございます。(口)

い音便

右のやうに、いいの音に變るものをい音便といふ。

う音便

買かひて

本を買って歸る。

輕か々しく

輕々しく振舞ふ。

長かく

髪を長う垂れる。(口)

苦くしくて

苦しうて走れません。(口)

右のやうに、ううの音に變るものをう音便といふ。

撥音便

飲かみて

水を飲んで苦みを忘る。

踏ふみて

夕に月を踏んで歸る。

呼よびて

呼んでも答へません。(口)

撥音便

飛び(たり) 溝を飛んだ(口)

右のやうに、撥ねる音んに變るものを撥音便といふ。

促音便

勝ちて 勝つて兜の緒を締めよ。

誓ひて 成功を誓つて都に上る。

破り(たり) やつと敵を破つた(口)

歸りて すぐ歸つて來ます(口)

促音便

右のやうに、促る音つに變るものを促音便といふ。

い音便の時にひる、う音便の時にふ、撥音便の時にむの假名を用ひるのは、いづれも誤である。

練習

一、次の文の音便の種類を説明せよ。

イ、人には表現の本能といふものがあつて、讀んだもの、聞いたもの、知つたもの、感じたもの、その他、苟も心の中を通つたものは、何かの機會にこれを表現しなければ已まないものであります。

ロ、女子御出生の吉報、嬉しう拜見仕り候。固より天の賜ふ所、何ぞ男女によつて喜の大小を別つべき。母子ともに健全ならば、即ち大慶たるべきことに御座候。

二、次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。

イ、學問は重荷を負ふて坂を攀づるが如し。

ロ、御來臨を辱ふし、感謝の至りに堪へず。

ハ、先生に就ひて文法を學ぶ。

ニ、よふこそ來て下さるました。

ホ、何分とも宜しふお願いいたします。

第三編 品詞 (その三)

第一章 助動詞の種類

時の助動詞

文語

やがて花も咲かん。

彼は将来發達せん。

既に花も散りき。

妹も學校に行きけり。

我は手紙を書き終へつ。

父は叔母の家に行きぬ。

口語

咲かう。

發達しよう。

散つた。

行つた。

終へた。

行つた。

時の助動詞

我は動物園を見たり。

見た。

姉は漸く^{あはせ}裕を縫へり。

縫つた。

右の文語の「んきけり」「つぬたり」と、口語の「うようた」とは、

いづれも時間に關係することを表すから、これを時の助

動詞といふ。

受身の助動詞

文語

兄は父に叱らる。

叱られる。

我は委員に選舉せらる。

選舉せられる。

口語

右の文語の「らる」と、口語の「れる」とは、他から或動作を仕向けられる意を表すから、これを受身の助動詞と

受身の助動詞

いふ。

可能の助動詞

文語

論語は我にても讀まる。

こゝよりも見物せらる。

電話ならば、直ちに消息

を通ずべし。

勢あたるべからず。

口語

讀まれる。

見物せられる。

可能の助動詞

右の文語のるらるべしべからと、口語のれるられるとは、そのものの力で爲し得る意を表すから、これを可能の助動詞といふ。

注意

文語のべしべからに對する口語の助動詞はない。

使役の助動詞

文語

母は子に手紙を書かす。

母は子をして手紙を書

かしむ。

主人は大工に家を建て

さす。

口語

書かせる。

建てさせる。

使役の助動詞

右の文語のすしむさすと、口語のせるさせるとは、他人に或動作を爲させる意を表すから、これを使役の助動詞といふ。

敬語の助動詞

【注意】 文語助動詞のしむに對する口語助動詞はない。

文語

口語

知事閣下は本校の卒業

臨まれる。

式に臨まる。

先生は生徒に本を教へ

教へられる。

らる。

殿下は知事を召さす。

殿下は博覽會を御覽ぜ

さす。

右の文語のるらるすさすと、口語のれるられるとは、いづ

敬語の助動詞

れも尊敬の意を表すから、これを敬語の助動詞といふ。

【注意】

一、文語助動詞のすさすに對する口語助動詞はない。

二、るらるれるられるは受身可能敬語の三様に用ひられずさすは使役敬語の二様に用ひられるが、これらはいづれもその意味によつて區別すべきである。

敬語の助動詞には、右の外に、動詞から轉じたものがある。

文語

口語

殿下は本校に記念品を

くださる。

たまふ。

謹みて書を足下にたて

さしあげる。

まつる。

右のたまふたてまつるくださるさしあげるは、いづれも動作を表すから動詞である。

文語

皇后陛下も蠶を飼ひた

まふ。

謹みて新年を賀したて

まつる。

口語

お飼ひあそばす。

お祝ひまをす。

右のたまふたてまつるあそばすまをすなどは、動詞の本來の意味から轉じて、單に尊敬の意を表すだけであるから、敬語の助動詞である。
音樂會には必ず出席します。

學校から何時頃に歸りますか。

右のますも敬語の助動詞であるが、この一語は口語特有のものである。

打消の助動詞

文語

風も吹かず。

友は學校に居らざりき。

我は人と争はじ。

彼は山に登るまじ。

口語

吹かぬ。吹かない。

私には出来なからう。

争ふまい。

登るまい。

右の文語のずざりじまじと、口語のぬないなからまいとは、いづれも動作の意味を打消すものであるから、これを

打消の助動詞

打消の助動詞といふ。

この中、じまじまいの三語は、動詞の意味を直接に打消さないで、多少推し量つて打消す助動詞である。

推量の助動詞

文語

文典は本箱にあらん。

恐らく彼は出席せん。

霰降るらし。

いかなる話なりけん。

しづ心なく花の散るらん。

口語

あらう。

出席しよう。

降るらしい。

誰か来るやうだ。

東が勝つたやうです。

風が吹きさうだ。

月も出づべし。

便利が悪いさうです。

推量の助動詞

右の文語のんらしけんらんべしと、口語のうようらしいやうだやうですさうださうですとは、いづれも物事を推し量つていふ意を表すから、これを推量の助動詞といふ。この中、けんは過去の物事を推量する場合にだけ用ひられる。

注意

一、文語の助動詞けんらんべしに對する口語の助動詞はない。

二、やうだやうですさうださうですは口語特有の助動詞である。

この中、やうですさうですはやうださうだより丁寧な詞である。

三、んうようは時と推量との二様に用ひられるが、これはいづれもその意味によつて區別すべきである。

べしは、可能・推量の外に、決心命令などの意を表すこともある。

一 雨天たりとも予は必ず參會すべし。
如何にしても討取り申すべし。

二 汝は直ちに目的地に向つて出發すべし。
午前八時までに運動場に集合すべし。

右の一は決心の意を表し、二は命令の意を表す。

人を侮るべからず。

樹木折るべからず。

べからは、可能の外に、現代文では、右の用例のやうに、ずの上にあつて禁止の意を表すことが多い。

希望の助動詞

文語

早く故郷に歸りたし。

健康にてあらまほし。

右の文語のたしまほしと、口語のたいだからとは、いづれも希望の意を表すから、これを希望の助動詞といふ。

指定の助動詞

文語

こゝは女學校なり。

我も人たり。

口語

歸りたい。

試合が見たからう。

口語

女學校だ。女學校です。

人だ。人です。

右の文語のなりたりと、口語のたですとは、いづれも物事

希望の助動詞

指定の助動詞

を指し定める意を表すから、これを指定の助動詞といふ。

注意 ですはだよりも丁寧な詞である。

比較の助動詞

文語

色、雪の如し。

口語

歲月は流るゝが如し。

雪のやうだ。	雪のやうです。
流れるやうだ。	流れるやうです。

右の文語の如しと、口語のやうだやうですとは、物事を比較する意を表すから、これを比較の助動詞といふ。

比較の助動詞

注意 やうだやうですは推量と比較の二様に用ひられるが、これはいづれもその意味によつて區別すべきである。

これまで説明した助動詞は、主に活用するものであるが、その活用形は巻末の表によつてこれを記憶せよ。

練習

- 一、次の文から助動詞を抜き出して、その種類を説明せよ。
- 二、大元帥陛下には、特に某將軍を遣はして、兵卒を督勵せさせ給ふ。
- 三、難解の書も努めて讀めば讀まるゝものなり。
- 四、はや曉近くなりぬれば、直ちに起き出でたり。
- 五、何事にても猥りに人に任すまじきものなり。
- 六、事務を執るには、瑣事たりとも仔細に吟味すべし。
- 七、人に問はるゝ時はいかゞ答へん。
- 八、自分の力の足りない時、人はいろ／＼のさもしい心理を経験する

ものだ。

チ、皆さんにお目にかゝりたくなりました。

リ、一日に十五里も歩ませると、丈夫な男子でも必ず疲れる。

ヌ、暑さは本當に釜の中で蒸すやうです。

ル、事實を率直に申せば、人間はパンなしでは生きられません。

ヲ、筋肉労働は人間が生れながらに課せられた第一の義務です。

ニ、次の文から活用する單語を抜き出せ。

イ、眞に人を愛するの道は、善くこれを教育するにあり。

ロ、古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。

ハ、手の舞ひ足の踏むところを知らざりき。

ニ、御手紙をいたゞいて誠に嬉しうございます。

ホ、貴い國に生れながら、國體を知らぬのは恥だ。

時の表し方

第二章 文語助動詞の用法

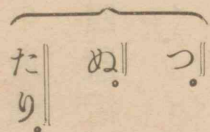
時の表し方

雨降り

馬走る

右の降り、走るは、動作の現在行はれてゐることを表す。

雨降り



雨降り

運動會を舉行せり

右のやうに、現在を表す動詞につぬたりりを結びつければ、動作が現在完了したことを表す。

右の四つの助動詞の中、つぬたりりは、すべての動詞の連用形に、りは四段活用の已然形とサ行變格活用の未然形とに結びつく。

月曜日到大掃除を行ひ

きり
けり

右のやうに、現在を表す動詞にきりりを結びつければ、動作が過去に起つたことを表す。

過去の意を表すきけりは、動詞の連用形に結びつく。ただし、きは、カ行變格活用とサ行變格活用との動詞には、次

のやうに結びつく。

活用の種類	動詞活用形	
	未然形	連用形
カ行變格	(來) こしし か	きしし か
サ行變格	(爲) せしし か	しし か

こし こそしかたゆくすゑを思ふ。
 こしか 急ぎこしかど及ばざりき。
 きし きしかたゆくすゑを思ふ。
 きしか 急ぎきしかど及ばざりき。
 せし 無禮をせしは我の過なりき。

せしか 行かんとせしかど許されざりき。
しき 直ちに敵を襲撃せんとしき。

過去を表すきけりに、更につぬたりりを重ねれば、動作が過去に完了したことを表す。

一、溺れし子を救ひ
てき。
てけり。

二、春の半ばは過ぎ
にき。
にけり。

三、敵も逃げ
たりき。
たりけり。

四、源氏は平家を滅せりき。

りけり。

右の中、三以外は、現代文では殆ど用ひられない。

今宵は母も歸らん。

やがて夏も來ん。

右のやうに、現在の動詞の未然形にんを結びつけければ、動作が未來に起る意を表す。
未來の意を表すんに、更につぬたりりを重ねれば、動作が未來に完了することを表す。

一、間もなく今日も暮れてん。

二、やがて藤の花も散りなん。

三、雨降り出でたらん折は、出發を中止すべし。

右の中、三以外は、現代文では殆ど用ひられない。
以上は時の助動詞の用法であるが、その他の助動詞が用
言に結びつく法則は、次の表について見よ。

種類	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に
ラ行變格	居ら	居り	居り	居る
ナ行變格	死な	死に	死ぬ	死ぬる
四段	讀ま	讀み	讀む	讀むる
上一段	見	見	見る	見る
上二段	起	起	起る	起る
下一段	蹴	蹴	蹴る	蹴る
下二段	捨て	捨て	捨つ	捨つる
カ行變格	こ	き	く	くる
サ行變格	せ	し	す	する

未然形に: 居ら、死な、讀ま、見、起、蹴、捨て、こ、せ
 連用形に: 居り、死に、讀み、見、起、蹴、たし、けん、し、き、捨て
 終止形に: 居り、死ぬ、讀む、見る、起る、蹴る、まじ、らし、べから、べし、く、捨つ、べから、べし、す、く、捨つ、べから、べし、する、くる、捨つ、(が)如し
 連體形に: 居る、死ぬる、讀むる、見る、起る、蹴る、なり、(が)如し

右の表によれば、

るすは、四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用の動詞の未
然形に結びつく。

らるさすは、右の活用以外の動詞の未然形に結びつく。

しむずざりじまほしは、すべての動詞の未然形に結びつ
く。

けんたしは、すべての動詞の連用形に結びつく。

らんらしまじべしべからは、動詞の終止形に、た、し、ラ行
變格活用の動詞には連體形に結びつく。

なりは、動詞の連體形に、如しは、直接にまたは「が」の助詞を
挿んで、動詞の連體形に結びつく。

注意 右の外、指定の助動詞のたりは體言だけに結びつく。

此等の法則は、主に動詞と助動詞との接續に關するものであるが、

汝は我よりも強きなり。

空の様もいと長閑かなりき。

今より大いに奮發せざるべからず。

右のやうに、形容詞または形容動詞と助動詞との接續、助動詞相互の接續などに於ても、承接しやうせうの法則は別に變らな
い。たゞし、現代文では、次のやうな用法も認められてゐる。

サ行變格活用の動詞にらるさすを添へる場合には、その

未然形に連ねて、批評せらるき掃除ぢせさすなどとするべきであるが、現代文では、批評さる掃除ぢさすなどとすることもある。(許容事項第五、第六參照)

しむが下二段活用の動詞の得えに接續する場合には、その未然形に連ねて得えしむとするべきであるが、現代文では、「得せしむ」とすることもある。(許容事項第七參照)

すべての文の終は終止形で結ぶべきであるが、時の助動詞きの場合には、連體形で結んで、甚だ面白かりし「姉は歸りし」などとすることもある。(許容事項第三參照)

サ行四段活用の動詞をししかに連ねる場合には、その連用形から連ねて、暮しし時過ししかばなどとするべきで

あるが、現代文では、暮せし時過せしかばなどとする事もある。
(許容事項第八参照)

練習

- 一、次の文によつて、用言と助動詞との連続を説明せよ。
 - イ、未だ走らるゝ元氣あり。
 - ロ、露けき野を分け行きけり。
 - ハ、ともに謀るに足らず。
 - ニ、日も既に暮れてけり。
 - ホ、義經の終はいかになりけん。
- 二、次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。
 - イ、年老いて氣力大いに衰へり。
 - ロ、無用のことには關係せまじきものなり。
 - ハ、誓うて君恩に報ひるべし。

第三章 口語助動詞の用法

口語助動詞と口語動詞の連続については、次の表を見よ。

種類	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に
四 段讀ませる	う	読み	讀む	まい讀む
上 一段起きられる	ない	た	起きる	(の)です
下 一段捨てさせるぬ(ん)		起きたい	捨てる	(の)だ
カ行變格	よ	捨てたから	捨てる	捨てるやうです
サ行變格	し	き	くる	くるさうだ
	まい	ます	する	するさうです

練習

- 一、次の文から助動詞を抜き出して、用言との連続を説明せよ。
- イ、たつた一度で懲りた。
- ロ、どちらが多いか、これから比較しよう。
- ハ、これほど便利な土地は、外にはあるまい。
- ニ、あの着物は私の妹にも着られる。
- ホ、那須與一に扇の的を射させる。
- ヘ、姉は縫物をするらしく、弟は本を讀むらしい。
- ト、雨が降る日でも出勤します。
- ニ、次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。
- イ、こんな面白い本はなからうと思ふ。
- ロ、あなたのお考に一任しませう。
- ハ、聊か鄙見を述べやう。

條件の助詞

條件の助詞

文語

- 一、雨降らば、行かじ。
- 二、水清くば、泳がん。
- 三、呼ばずば、來らじ。
- 四、苦あれば、樂あり。
- 五、水清ければ、魚棲まず。

口語

- 雨が降れば、行くまい。
- 水が清ければ、泳がう。
- 呼ばなければ、來まい。
- 苦があれば、樂がある。
- 水が清ければ、魚が棲まな
い。

右の中、文語のばは、一・二・三のやうに、活用する語の未然形

に結びついて假定の條件を表し、四・五のやうに、已然形に結びついて確定の條件を表す。たゞし、口語では、いづれも已然形だけに結びついて、假定と確定の條件を表す。

文語

雨降るとも、行かん。
招かずとも、來らん。
いかに山高くとも、登らん。

口語

雨が降つても、行かう。
招かなくても、來よう。
どんなに山が高くても、登らう。

右のやうに、文語のともは、形容詞の連用形または動詞助動詞の終止形に結びついて假定の條件を表す。たゞし、現代文では、

數百年を経るとも。

いかに批評せらるゝとも。

掃除せしむるとも。

のやうに、連體形にも結びつく。

(許容事項第一一参照)

口語では、ともとなつて、活用する語の連用形に結びついて、假定の條件を表す。

文語

見れども見えぬ。
泳がず。

口語

見られども見えない。
泳がない。

呼びたれ ど ども 應へず。 呼んだ け れ ど ども 應へない。

右のやうに、文語のどどもは、活用する語の已然形に結びついて、確定の條件を表す。
たゞし、現代文では、

何等の理由あるも、ありとも、入場を許さず。

期限は今日に迫りたるも、たれども、準備未だ成らず。

のやうに、ともども、の代りにも、を用ひることもある。ただし、

給金は低きも (低くとも)、應募者は多かるべし。

請願書は會議に付するも (付すれども)、これを朗讀せず。

のやうに、二様に解かれる時には用ひない。(許容事項第一五参照)
口語では、けれど けれども となつて、活用する語の終止形に結びついて、確定の條件を表す。

禁止の助詞

禁止の助詞

文語

汝はこゝに居るな。
みだりに人を笑ふな。
近く寄つて過すな。

口語

居るな。
笑ふな。
するな。

右のやうに、文語の禁止の助詞のなは、ラ行變格活用の動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に結びつく。
口語の場合の用法も、文語の場合の用法と同じであるが

疑問の助詞

口語では、文語のラ行變格活用の動詞は四段に活用するから、口語の禁止の助詞のなは、すべての動詞の終止形に結びつく。

疑問の助詞

文語

花ありや、なしや。

花あるか、なきか。

鹿の音を聞きたりや。

鹿の音を聞きたるか。

口語

あるか、ないか。

聞いたか。

右のやうに、文語では、疑問のやは活用する語の終止形に、かは連體形に結びつくのが本則である。

たゞし、現代文では、やも連體形に結びつく。(許容事項第一〇参照)

口語では、かだけを用ひて疑問の意を表す。

甲乙いつれを取るか。

答幾何なるか。

汝は誰なるか。

右のやうに、いつれ幾何誰などの疑問の語が上にある場合には、かを用ひて文を結ぶのが本則である。

たゞし、現代文では、やで結ぶこともある。(許容事項第一四参照)

反語の助詞

反語の助詞

文語

悔ゆともかひあらんや。—そんなことがあるものか。

口語

物事を列挙する助詞

何をか隠さん。

— 今日中に出来ますものか。

右のやうに、文語のや、かは、いづれも文の意味を轉じるものであるから、これを反語の助詞といふ。

口語では、かだけを^レ用ひて反語の意を表す。

呼ぶとも應へんやは。

かゝるよき折またとあるべきかは。

右のやうに、やは、かはも反語の助詞で、や、かよりは一層意味が強い。此等とともに文語特有のものである。

物事を列挙する助詞

文語

月と花とを賞す。

口語

— 私は甥と姪とを訪ねる。

右のやうに、とは物事を列挙する助詞であるが、かやうな場合には、語句ごとにとを用ひるのが本則である。たゞし、現代文では、誤解を生じない場合には、最後のとを略することが多い。例へば、

文語

我は春と秋を好む。

— 三と四の和は七である。

のやうな文では、とを略しても誤解を生じない。しかし、

地理と歴史の一部を復習しました。

のやうな文では、

地理の一部と歴史の一部とを復習しました。

地理の全部と歴史の一部とを復習しました。

言葉を言ひ
きる助詞

の二様に解せられるから、かやうな場合にはとを省略し
ない。
(許容事項第一三参照)

言葉を言ひきる助詞

文語

我が軍大勝せりとの報
あり。

口語

見たことはないと答へま
した。

右の文のとは言葉を言ひきる場合に用ひられるもので、
活用する語の終止形に結びつくのが本則である。
たゞし、現代文では、

月出づると見えて……………
嘲弄せらるゝと思ひて……………

別にとへの區別

別にとへの區別

のやうに、連體形にも結びつく。
(許容事項第一二参照)

文語

東京に|行く。
前に|立つ。
東京へ|行く。
前へ|進め。

口語

棚に|上げる。
箱に|入れる。

右の文語のには動作の歸着する點を表し、へは動作の方
角を表すものである。それゆゑ「東京に」といへば、必ず東
京に到着することを表し、「東京へ」といへば、東京の方角を
表すだけで、東京に行くか行かぬかは不定である。たゞ

係結の助詞

し、口語では、下段に示すやうに、區別なしに用ひられる。

係結の助詞

文語

よくぞ歸りし。

心なん正しかりける。

夜や更けぬる。

汝は誰とか遊べる。

このたびこそは成功せ

め。

口語

誰ぞ来てほしい。

何かありませう。

ようこそ来て下さいまし
た。

右の文語のぞなんやかこそは、いづれも文の結に關係を及ぼすものであるから、これを係結からむぎの助詞といふ。この

中、ぞなんやかが上にある時には、必ず連體形で文を結び、こそのある時には、必ず已然形で文を結ぶべきである。口語では、右の下段のやうに、ぞかこそなどを用ひても、文の結には何等の關係も及ぼさない。

注意

なんやは文語特有の助詞である。

だにすらさへの區別

文語

陸地の片影だに見えず。

一錢だに與へられず。

禽獸すら恩を知る。

鳩にすら三枝の禮あり。

口語

陸地の片影さへ見えない。

一錢でもやられない。

禽獸さへ恩を知る。

鳩にでも三枝の禮がある。

だに・すら
への區別

右のやうに、文語のだにすらは、或物を舉げて他を類推るゝするさせる意を表す。

口語では、文語のだにすらに對して、さへでもを用ひる。

文語

雨降り、風さへ吹く。

口語

雨が降り、風まで吹く。

暑さ烈しく、蚊さへ多し。

暑さが烈しく、蚊まで多い。

右のやうに、文語のさへは、あるが上になほ物の添ひ加はる意を表す。

口語では、文語のさへに對して、までを用ひる。

願望の助詞

願望の助詞

時鳥ほしどりの聲を尋ね歩かばや。

花の都のこと語らなん。

右のばやなんは、いづれも願望の意を表すもので、活用する語の未然形に結びつく。

注意 ばやなんは文語特有の助詞である。

練習

一、次の文の傍線を施した助詞の用法を説明せよ。

イ、日もはや暮れんとするに、時雨さへ打注ぐ。

ロ、今宵こそは月見をしよう。

ハ、富士山の高さは幾何なりや。

ニ、來らば來れ、恐れんやは。

ホ、樂があれば、必ず苦がある。

- へ、命を捨つとも、厭はじ。
- ト、食へども、その味を知らず。
- ニ、次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。
- イ、學びてこそ人たるかひあらん。
- ロ、當日雨天なれば、順延と心得るべし。
- ハ、成績悪しとも、失望するに及ばじ。
- ニ、一分の時さへ空しく過すべからず。
- ホ、洋服地と帽子の見本を送れ。

第五章 紛れ易い品詞

多くの單語の中には、語形が同じで、その所屬の品詞を異にするものがあり、また、同じ品詞の中で種類を異にするものがあつて、品詞の分類上極めて紛れ易いから、左に

なりの區別

その主なものを説明しよう。

なりの區別

- 一、讀書の好時節となりぬ。
 - ニ、彼は予を欺きたるなり。
 - 三、寝るなり、起きるなり、あなたの自由です。
- 右のなりの中、一は動詞、ニは活用する語の連體形に結びつく指定の助動詞、三は口語特有の物事を並べる助詞である。

たりの區別

たりの區別

- 一、彼も人たり、我も人たり。
- ニ、主はいたく寝入りたり。

三、春の海洋々たり。
右のたりの中、一は體言に結びつく指定の助動詞、二は動詞の連用形に結びつく時の助動詞、三は形容動詞の活用語尾である。

ぬの區別

ぬの區別

- 一、一夜の間に灰塵となりぬ。
- 二、轉ばぬ先の杖。

右のぬの中、一は動詞の連用形に結びつく時の助動詞、二は動詞の未然形に結びつく打消の助動詞ずの連體形である。

なの區別

なの區別

- 一、烈しき風吹きなば、この木も倒れぬべし。
- 二、我を忘るな。
- 三、彼も老いけるよな。

右のなの中、一は動詞の連用形に結びつく時の助動詞ぬの未然形、二は動詞の終止形に結びつく禁止の助詞、三は感歎の意を表す助詞である。

なんの區別

なんの區別

- 一、やがて花も散りなん。
- 二、疾く花も咲かなん。
- 三、櫻をなん見に行きける。

右のなんの中、一は散つてしまはうの意で、二つの單語か

ら成りなは動詞の連用形に結びつく時の助動詞ぬの未然形、んは未來の意を表す時の助動詞、ニは動詞の未然形に結びつく願望の助動詞、三は係結の助動詞である。

しかの區別

しかの區別

- 一、かくこそ思ひしか。
- 二、いつ頃歸りしか。

右のしかの中、一はこそその結で、時の助動詞きの已然形、ニは二つの單語で、しは時の助動詞きの連體形、かは疑問の助詞である。

練習

次の文の傍線を施した部分を説明せよ。

- 一、(イ) 人たる道。
- (ロ) 行きたる人。
- 二、(イ) 閣下には日々運動せらる。
- (ロ) 父に叱責せらる。
- (ハ) こゝよりも試合を見らる。
- 三、(イ) 昨日こそ早苗とりしか。
- (ロ) 何事も無かりしか。
- 四、(イ) 今日傘も不用なるべし。
- (ロ) 傘を持參すべし。
- 五、(イ) 今これを説明するなり。
- (ロ) その謀空しくなりぬ。

第四編 文章

第一章 文及び文の成分

鳥 啼く。 風 吹く。
 山 高し。 水 清し。

此等は、品詞編に述べたやうに、文法上、言語の單位として取扱はれるものであるから單語である。

鳥 啼く。
 風 吹く。
 山 高し。
 水 清し。

文

主語
述語

右は單語が集合して完結した一つの思想を表すもので、これを文といふ。

主語述語

右の文で、鳥風山水はいづれも文の主題となり、啼く吹く高し清しはいづれも主題の動作有様などを述べるものである。かやうに、文の主題となるものを主語といひ、主題について述べるものを述語といふ。

注意 述語は主題について説明するから説明語ともいふ。

星 稀なり。
 平和は 來れり。
 風ばかり 吹いてゐる。

右のやうに、主語は體言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成る。

過ぎたるは 及ばざるが如し。

生れたのは 女の子です。

右のやうに、體言のやうに用ひられるものも主語となる。

人 來る。

花は 咲かざりき。

月が 出ましたね。

右のやうに、述語は用言が單獨かまたは助動詞や助詞と結びついたものから成る。

孔子は 聖人なり。

聲 雷の如し。

汝は 誰ぞ。

右のやうに、體言と助動詞や助詞と結びついたものも述語となる。

雨 降り來れり。

風も 吹きやみぬ。

鳥が 啼いてゐる。

右のやうに、動詞の重なつたものも述語となる。

太郎も次郎も 登校せり。

植物は 發生し成長し枯死す。

太郎も次郎も三郎も 運動し勉強する。

右のやうに、一つの文の中に、主語も述語も二つ若しくは二つ以上あることもある。

客語

犬 門を 守る。

子供が 笛を 吹く。

右の文の述語はいづれも他動詞であるから、門を、笛をのやうな目的語を入れねば、文の意味が完全にならない。

病は 口より 入る。

歳は 十五に なる。

右の文の述語はいづれも自動詞であるが、口より、十五にのやうな標準を表す語を入れねば、文の意味が完全にな

客語

らない。

右に述べたやうに、文の目的、または標準を表す語を客語といふ。

客語は、前に挙げた例のやうに、主に體言に助詞をに、よりのなどの結びついたものである。

馬(を) 繫ぐべからず。

樹木(を) 折り取るべからず。

右のやうに、客語は助詞をを省略することもある。

強いのは 弱いのを 苦しめる。

老人が 若いのに 扶けられる。

右のやうに、用言が體言のやうに用ひられて客語となる

こともある。

先生 生徒に 裁縫を 教ふ。

父が 子供に 名を 太郎と つけた。

右のやうに、文の性質によつては、客語が二つ若しくは二つ以上あることもある。

修飾語

水 甚だ清し。

面白い話がある。

右の甚だは清しを修飾し、面白いは話を修飾する。かやうに、他の語を修飾するものを修飾語といふ。修飾語は主に次のやうなものから成る。

修飾語

一、形容詞または形容詞のやうに用ひられるもの。

清き水 流る。

かゝやく入日 美しや。

これは 面白くない話だ。

これから東が あなたの屋敷です。

注意 右のやうに、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふこともある。

二、副詞または副詞のやうに用ひられるもの。

水勢 殊に激し。

英語を 怠らず學ぶべし。

雲は 墨のやうに黒い。

運動會が 昨日ありました。

注意

右のやうに、體言以外のものを修飾するものを副詞的修飾語といふこともある。

右に述べた修飾語は極めて簡単なものばかりであるが、多くは次のやうに複雑なものである。

花を見る人群集せり。

風頗る烈しく吹けり。

私の家の前の櫻が非常に綺麗に咲いた。

接續語

我は地理及び歴史を好む。

接續語

私は東京へ行き、それから日光へ廻つた。

右の及びそれからのやうに、語句または文を接續するものを接續語といふ。

接續語は接續詞から成る。

獨立語

あはれ、今日も暮れぬ。

おい、兄さん、あなたも見物に行きますか。

右のあはれ、おい、兄さんのやうに、文の主要部から獨立する語を獨立語といふ。

獨立語は感動詞及び呼掛よびかけの語から成る。

以上述べた主語・述語・客語・修飾語・接續語・獨立語のやうに、

獨立語

文の成分

文を構成する要素を文の成分といふ。

練習

次の文を文の成分に分けよ。

- 一、春の花は恰も錦の如し。
- 二、婦人は家庭の改善に努力すべし。
- 三、校長は勤勉なる生徒を譽めたり。
- 四、お花やおまへはお菓子とそれから砂糖を買つておいで。
- 五、あんなに恐しい震災は今後決してありません。
- 六、紫式部は源氏物語を著した才女である。

第二章 節

文がその獨立を失つて、更に他の文の成分となるものを

節

節といふ。

歲月の流るゝは早し。

身體が良いのは頼もしい。

右のやうに、主語の地位にある節を主語節といふ。

瀬戸内海は波靜かなり。

松島は景色がよい。

右のやうに、述語の地位にある節を述語節といふ。

乗客は列車の來るを待てり。

聲は猫が鳴くのに似てゐる。

右のやうに、客語の地位にある節を客語節といふ。

學徳高き人は稀なり。

客語節

述語節

主語節

修飾節

春が來たが花が咲かない。
右の學徳高きは人を修飾し、春が來たがは下の文を修飾するものである。かやうな節を修飾節といふ。

夏は暑く、冬は寒し。

髪は亂れ、顔は青く、衣は破れてゐる。

對立節

右の傍線を施したものは、いづれもその獨立を失つて、下の文と對立的に結びつくものである。かやうな節を對立節といふ。

練習

次の文を成分に分けよ。

一、良藥口に苦しとはよき諺なり。

二、姉は裁縫を好み、妹は音樂を好む。

三、鶴は首も長く、足も長い。

四、この會社は品行の正しい人を雇ひます。

五、困難な有様は盲人が杖を失つたと同じだ。

第三章 文の成分の倒置及び省略

前二章に説明した文の成分は、たゞ順序なしに排列されるものでなく、通常次のやうな一定の順序に従ふものである。

一、主語は述語の上に、述語は主語の下にある。

時は金なり。

飛行機が飛んでゐる。
主 述

二、客語は主語と述語との間にある。

兄は陸軍大尉となる。
主 客 述

父は手紙を子に渡せり。
主 客 客 述

三、修飾語は被修飾語の上にある。

都會の生活は危険なり。
主 修 述

私は大聲で獨唱します。
主 修 述

四、接續語は接續すべき語句または文の間にある。

生徒は國語及び漢文を學べり。
主 客 接 客 述

彼は文を學び且武を練る。
主 客 述 接 客 述

五、獨立語は主に文の首位にある。

文の成分の倒置

すはや、敵軍寄せ來る。
獨 主 述

あれ、自動車が來た。
獨 主 述

右の法則は、文の成分の通常的位置に關するものであるが、場合によつては、言葉の調子を整へ、または文の意味を強めるために、成分の位置を置き換へることがある。これを文の成分の倒置といふ。

一、主語・述語の倒置

悠々たるかな、天地。
二 一

強いですね、あなたは。
二 一

二、客語の倒置

何を汝は買ひしぞ。
二 一 三

いくつになつたか、お前は。

三、修飾語の倒置

花も咲きけり、み吉野の。

私も驚きましたね、多少は。

四、獨立語の倒置

續け、ものども。

行きませう、さあ。

文の成分はいづれも文を構成する上に必要なものばかりであるが、これを省略しても誤解の生じない場合には、文を簡潔にしまたは語勢を強めるために、或成分、または或成分の主要でない部分を省略することがある。これ

文の成分の省略

を文の成分の省略といふ。

一、主語・述語の省略

(誰も)堤の上に登るべからず。

え、(私は)口惜しい。

いざ、(貴殿は)こなたへ(入り給へ)。

兄は京都へ(行き)、弟は大阪へ行つた。

二、客語の省略

犯人は直ちに(警官に)捕縛せられたり。

私は入學を(學校長に)許可されました。

私は英語を少しも知りません。あなたはうまく(それ

を)おやりでせう。

右はいづれも文の或成分を省略したものである。この外、次のやうに、二つ以上の成分または成分の主要でない部分を省略することもある。

敵軍來れり。(予は直ちに部下をしてこれを攻撃せしむ。

私は父から繪本を貰つた。それから妹も父から繪本を(貰つた)。

右は二つ以上の成分を省略したものである。

樂は苦の種(なり)、苦は樂の種(なり)。

昔は昔(だ)、今は今(だ)。

右は成分の主要でない部分を省略したものである。

練習

一、次の文の成分を通常の位置に置き換へよ。

イ、諸子の健康を余は切に祈る。

ロ、思はざりき、こゝにて君に逢はんとは。

ハ、雲のいづこに月宿るらん。

ニ、そら、落ちた、雷が。

ホ、苦の中に樂がある。

二、次の文の省略された成分を補へ。

イ、堪忍は無事長久の基。

ロ、春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。

ハ、こゝに馬繫ぐべからず。

ニ、あなたはどちらへ。

ホ、はい、東京まで。

第四章 文の組織上の種類

文をその組織の上から分類すると、單文、複文、重文となる。

雨降る。

落花雪の如し。

生絲と茶とは我が國の重要な輸出品だ。

生徒は校則を守るべし。

英國民は實名を尊び、虚名を欲せず。

兄と弟とは國語と漢文とを某先生に學べり。

右のやうに、主語と述語との關係が、文法上の形式に於て

たゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

單文

複文

彼は性質溫良なり。

生あるものは必ず滅す。

良藥口に苦しとは有名なる諺なり。

多くの人は己の愚なるを知らず。

物價が騰貴すると、細民が生活に困る。

右のやうに、對立節以外の節を含む文を複文といふ。

天高く、地低し。

言ふは易く、行ふは難し。

月明かに(にて)にして、星稀なり。

砂は白く、松は青い。

木は倒れ、瓦は碎け、壁は落ち、家は傾いてゐる。

重文

右のやうに、對立節を含む文を重文といふ。

以上は單文複文重文の大要であるが、時には、此等が混合して、複雑な形をとることがある。次の例を見よ。

花咲き鳥啼く春は樂しきものなり。(重文を含む複文)

花咲く春は暖かく、雪降る冬は寒し。(複文が對立する重文)

花咲き鳥啼く春は樂しく、霜牙え雪

降る冬は寂し。

(重文を含む複文が對立する重文)

練習

次の文を組織の上から分類せよ。

- 一、氣候順調なりしかば、年も豊かなりき。
- 二、この庭は石燈籠の配置がうまい。

三、問ふは當座の耻にして、問はぬは一代の耻なり。

四、降り積る雪は北陸山陰の地を銀世界にした。

五、停車場は、下りる人もあり、乗り込む人もあり、迎へに來た人もあり、見送りに來た人もあつて、非常に混雜してゐました。

第五章 文の性質上の種類

文をその性質の上から分類すると、平叙文・疑問文・命令文・感歎文の四種となる。

健全なる精神は健全なる身體に宿る。

月は地球の周圍を廻轉す。

秋には人を壓しつけるやうな寂しさがある。

右のやうに、思想をすなほに叙述する文を平叙文といふ。

平叙文

疑問文

諸子は嘗て文法を學びしことありやなしや。
空中を支配する時代も來りしにあらずや。
願つたら、先生が許して下さるでせうか。

右のやうに、疑問または反語の意を表す文を疑問文といふ。

時のある時に時を得よ。

今日思考して、明日語れ。

長いものには巻かれよ。

右のやうに、命令の意を表す文を命令文といふ。

今日九重に匂ひぬるかな。

世に處するもまた難いかな。

命令文

感歎文

あゝ、あつばれな勇士だ。

右のやうに、感歎の意を表す文を感歎文といふ。

練習

次の文を性質の上から分類せよ。

- 一、汝若し幸運を望まば、自らこれを求めよ。
- 二、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。
- 三、古より貞女は二夫に見えずといはずや。
- 四、かく情ある人もありけるよ。
- 五、野分のあしたこそをかしけれ。
- 六、道路は左側を通行せらるべし。
- 七、午後の六時頃までには必ずいらつしやいませ。
- 八、試験もお蔭で都合よく済みました。

九、運動部の委員には誰が適任でせう。
一〇、まあ、この雨天によくいらつしやいましたこと。

女子現代日本文法終

附録

文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日
文部省告示第五十八號)

- 一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。
- 三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五、「セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六、「セラル」トイフベキ場合ニ、「サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

罪サル。

評サル。

解釋サル。

七、「得シム」トイフベキ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」過シシカバ「チドイフ

ベキ場合ヲ「暮セシ時」過セシカバ「チドトスルモ妨ナシ。

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをは「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限りニアラズ。

一〇、疑ノてにをは「ヤ」ハ、動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二、てにをは「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ、

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三、てにをは「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをは「トハ」誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最終

ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例

月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳②ヲ讀ムベシ。

四、上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例

誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五、てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六、「トイフ」「トイフ」語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

文										令			
カ行變格	カ行變格	下一段	上一段	四段	縫	有	死	着	落	蹴	與	來	爲
は	ら	な	ら	は	は	ら	な	ら	ち	け	へ	こ	し
ひ	り	に	り	ひ	ひ	に	に	き	ち	け	へ	き	し
ふ	る	ぬ	る	ふ	ふ	ぬ	ぬ	きる	ちる	ける	へる	くる	する
ふ	る	ぬ	る	ふ	ふ	ぬ	ぬ	きる	ちる	ける	へる	くる	する
へ	れ	ね	れ	へ	へ	ね	ね	きれ	ちれ	けれ	へれ	くれ	すれ
へ	れ	ね	れ	へ	へ	ね	ね	きよ	ちよ	けよ	へよ	こい	せよ
活用名	活用形	形未然	形連用	形終止	形連體	形已然	形命令						

(現・女現)

表 用 活 詞 動

サ行變格	カ行變格	下二段	下一段	上二段	上一段	ナ行變格	ラ行變格	四段	活用名	文
(爲)	(來)	與	(蹴)	落	(着)	死	有	縫	語 活用形	
せ	こ	へ	け	ち	き	な	ら	は	形未然	
し	き	へ	け	ち	き	に	り	ひ	形連用	
す	く	ふ	ける	つ	きる	ぬ	り	ふ	形終止	
する	くる	ふる	ける	つる	きる	ぬる	る	ふ	形連體	
すれ	くれ	ふれ	けれ	つれ	きれ	ぬれ	れ	へ	形已然	
せよ	こよ	へよ	けよ	ちよ	きよ	ね	れ	へ	形命令	

サ行變格	カ行變格	下一段	上一段	四段	活用名	口			
(爲)	(來)	與	(蹴)	落	(着)		死	有	縫
しせ	こ	へ	け	ち	き	な	ら	は	形未然
し	き	へ	け	ち	き	に	り	ひ	形連用
する	くる	へる	ける	ちる	きる	ぬ	る	ふ	形終止
する	くる	へる	ける	ちる	きる	ぬ	る	ふ	形連體
すれ	くれ	へれ	けれ	ちれ	きれ	ぬ	れ	へ	形已然
せよ	こい	へよ	けよ	ちよ	きよ	ね	れ	へ	形命令

(現・女現)

女子現代日本文法

一五、てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。
例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)、議場ニ入ルコトヲ許サズ。
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)、準備ハ未ダ成ラズ。
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)、昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六、「トイフ」「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。
例

イハユル哺乳獸ナルモノ。
顔回ナルモノアリ。

一五、てにをは「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六、「トイフ」「トイフ」語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。
顔回ナルモノアリ。

文									口										
活用名	縫	有	死	落	(着)	上二段	下二段	力行變格	サ行變格	活用名	縫	有	死	落	(着)	上二段	下二段	力行變格	サ行變格
語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語
形未然	は	ら	な	ち	き	け	へ	こ	せ	形未然	は	ら	な	ち	き	け	へ	こ	せ
形連用	ひ	り	に	ち	き	け	へ	き	し	形連用	ひ	り	に	ち	き	け	へ	き	し
形終止	ふ	り	ぬ	つ	きる	ける	ふ	く	す	形終止	ふ	る	ぬ	ちる	きる	ける	へる	くる	する
形連體	ふ	る	ぬる	つる	きる	ける	ふる	くる	する	形連體	ふ	る	ぬる	ちる	きる	ける	へる	くる	する
形已然	へ	れ	ぬれ	つれ	きれ	けれ	ふれ	くれ	すれ	形已然	へ	れ	ぬれ	ちれ	きれ	けれ	へれ	くれ	すれ
形命令	へ	れ	ね	ちよ	きよ	けよ	へよ	こよ	せよ	形命令	へ	れ	ね	ちよ	きよ	けよ	へよ	こい	せよ

(現女現)

語根の辨別	前	同	後	新	種	用	表	語
受	受	受	受	受	受	受	受	受
未	未	未	未	未	未	未	未	未
應	應	應	應	應	應	應	應	應
終	終	終	終	終	終	終	終	終
命	命	命	命	命	命	命	命	命

不 二 異 語 根 十 種 語 根 表 用 種 新 國

注意

指定の助動詞のたりに體言だけに連續する。

終	終	終	終	終	終	終	終	終
命	命	命	命	命	命	命	命	命
應	應	應	應	應	應	應	應	應
未	未	未	未	未	未	未	未	未
受	受	受	受	受	受	受	受	受

(女 現)

表續連のと言用と詞動助語口

未 然 形 に	う れる せる よう られる させる ない なから ぬ まい (四段は終止形に)
連 用 形 に	た ます たい たから
終 止 形 に	らしい
連 體 形 に	やうだ やうです さうだ さうです (連用形にも)

注意 指定の助動詞のたてすは體言だけに連続する。

(女現・新)

文語世語同も用言との形辭表

未 然 形 に	う れる せる よう られる させる ない なから ぬ まい (四段は終止形に)
連 用 形 に	た ます たい たから
終 止 形 に	らしい
連 體 形 に	やうだ やうです さうだ さうです (連用形にも)

(女現・新)

女子現代日本文法

未	未	未	未	未	未
終	終	終	終	終	終
話	話	話	話	話	話
文	文	文	文	文	文
法	法	法	法	法	法
一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九
十	十	十	十	十	十

大正十一年十一月十一日印
 大正十二年二月十三日訂正再版印刷
 大正十二年五月十六日訂正再版發行
 大正十三年八月一日修正參版印刷
 大正十三年八月五日修正參版發行
 大正十四年一月四日訂正四版印刷
 發行

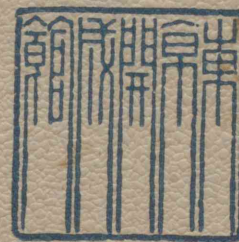
著者 有所權



著者 東京開成館編輯所
 發行者 株式會社 東京開成館
 印刷者 出雲寶太郎
 發行所 株式會社 東京開成館
 東部販賣所 林平次郎
 西部販賣所 三木佐助

東京開成館編輯所
 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 株式會社 東京開成館
 代表者 渡邊良助
 東京市神田區今川小路一丁目三番地
 出雲寶太郎
 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 株式會社 東京開成館
 振替貯金口座東京第五三三二番
 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
 三木佐助
 東京市日本橋區數寄屋町九番地
 林平次郎

女子現代日本文法
 定價四拾貳錢
 臨時定價
 七拾六錢



広島大学図書

2000073168



25
168